様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月５日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０７３１
研究課題名（和文）
１６－１７世紀モスクワ国家の統治機構と士族層
研究課題名（英文）
The Constitution and *Dvoryanstvo* in 16th and 17th Century Russia.
研究代表者
浅野　明　（ASANO AKIRA）
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：90133909

研究成果の概要（和文）：
本研究は，16～17 世紀モスクワ国家の中小土地所有者（士族）を取り上げ，統治構造のなかで彼らが果たした役割について，主に軍事・軍制面から検討を加えた。その成果は，はじめに研究史整理（文献・史料の収集・整理）をおこない，２年目と３年目に，その成果の公表・公刊に努めた。また，この研究から派生して，わが国における戦争体験について，当時の人びとの証言をもとに再構成する試みも行った。それらの具体的な成果については，後掲の「研究の成果」以下の項を参照されたい。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study is to investigate how *Dvoryanstvo(the middle service class)* played the decisive role in 16th－17th Russia. The results are as follows: the first year of this study was devoted to arrange the earlier literatures, the second and the third years the results of these studies were published. See below for further details.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学
キーワード：ロシア史，17 世紀，士族，軍隊

１．研究開始当初の背景
（１）①16～17 世紀モスクワ国家で，統治と軍事の両面で主要な役割を果たしていた士族層について，わが国ではほとんど研究が行われていないことが，研究開始の一つの背景である。彼らは，決して個別に存在していたのではなく，都市ごとに団体をつくって統治に参画しており，この点で，西欧諸国の社団国家とも共通点を有する。近年の，西欧における当該研究の隆盛を考慮すれば，この研究の後れは，早急に改善されねばならない。②具体的には，彼らがどのような団体に編成されていたのか，地方行政および軍隊における役割はどのようなものであったのかということについて考察を試みた。
（２）①前述したように，とりわけ士族層については，軍事面において重要な役割を果たしていたにもかかわらず，その研究はほとんど行われてこなかった。軍隊の研究は，具体的な戦争の過程・戦闘行為のなかでこそ，研究されねばならない。②また当該期については，戦争の相

手はしばしば西欧諸国であったから，西欧諸国の軍事・軍制についての研究も不可欠となる。
（3）さらに，軍事史については，近年ようやく活発に行われるようになってきたが，それらの大部分は，「新しい軍事史」「広義の軍事史」といわれるものであって，具体的な戦争の過程の中で軍隊を研究する，いわゆる「狭義の軍事史」については，ロシア史研究に関してのみならず，西欧研究に関しても，わが国では未だに事実上のタブーとされており，研究史上の空白となっている。この点の克服を目指して，戦闘技術という，軍事史のもっとも基礎的な分野について研究することも，課題の一つであった。
（4）さらに，これらの研究から派生するものとして，わが国における戦争体験の問題にも取り組んだ。これは，それ自体としても重要なテーマであるが，日本の西洋史研究者が，グローバル化の流れのなかで，自らのアイデンティティをとらえなおそうとするときに，新しい視点を提供してくれると考えられるからである。この課題は，日本史研究者によってしばしば行われているが，西洋史研究者の立場からのものは，近年はほとんどなくなっている。この点の反省もこめて，別個の課題として取り組んだ。

２．研究の目的
（1）１６～１７世紀モスクワ国家は，動乱時代を挟んで，ロシア史上の重要な転換期であった。この時期をはさんで，政治も国制も大きく変化し，その先に，いわゆるツァリーズムが現われてくるからである。ツァリーズムは，ロシアの歴史のあらゆる側面に影響を与えた重要な特徴であるにもかかわらず，このテーマについて，社会構造という面から検討を加える試みは，わが国では未だ十分ではない。この点について，具体的に検討を始めることが目的の一つであった。
（2）①そこで，１６世紀末から１７世紀初頭にかけての動乱時代について，いくつかの問題を取り上げ，政治体制や国制の転換につながる諸事実を析出・検証することを最初の課題とした。なぜなら，この動乱を克服する過程のなかで，同世紀後半以降に成立してくるツァリーズムの方向性と，それぞれの身分・階層の社会的位置づけが，かなりの程度決定されたからである。②ここで避けて通れないのが，戦争の研究である。17世紀は，西欧のみならず，ロシアにおいても，戦争の世紀であった。具体的な戦争の経過が，政治過程に大きな影響を与えたことは疑うことができないからである。
（3）さらに，この時代は，なによりも戦争や外交交渉を通じて，西欧諸国との交流が，急速に発展し，その軋轢もまた高まった時期であった。動乱時代と，それに続く戦争・外交交渉の研究は，西欧諸国との，広い意味での文化交流を検討することにもつながる。この研究では，その第１歩として，ロシアと西欧諸国それぞれの軍隊編制の問題を，比較の観点を念頭に置きながら検討した。
（4）上述した４番目の課題は，すでに述べたように，日本における西洋史研究者が，グローバル化の中で自らのアイデンティティを再検討するときの，一つの手がかりとなることを意図していた。ここでは，本研究の趣旨に沿って，戦争に対する日本人の体験およびその記憶の特徴を明らかすることを目指した。これは，本題から派生した課題ではあるが，今後の研究の基本姿勢を確認する意味でも，重要なものであった。

３．研究の方法
（1）動乱時代の実相を具体的にみるという課題については，同じ時期のロシアの歴史及び文献学的な研究に取り組んでいる研究者とともに，当時書かれた史料の試訳に取り組んだ。史料は，「パーリツィンの回想録」で，これは重要な一次史料でありながら，わが国では，これまで全く紹介・研究されてこなかった。この研究は現在も進行中であるが，その成果の一部については，後述する。
（2）①ツァリーズム成立期における士族の役割，とくに軍事面におけるそれについては，具体的な戦争を背景において，その大枠を明らかにすることに努めた。②西欧との比較という側面については，次項で述べる翻訳出版の監修作業をとおして，きわめて的確・具体的に検討することができた。
（3）狭義の軍事面については，中世以来，ナポレオンに至るまでの，西欧の軍事技術の歴史についての訳本の監修にあたり，それらをとおして，中世から近代初頭にいたるまでの戦闘技術について，専門的な知識を獲得することを目指した。またこの課題は，前述の課題（1）とも密接に関連しており，ここでも，当時の軍人や外交官の回想録等に基づいて研究をおこなった。
（4）日本人の戦争体験という面では，有名無名を問わず，当時の人々の日記や回想録をもとに，その戦争体験を再現し，そこから日本人の行動パターン，あるいはまた，その歴史認識の欠陥とでもいうべきものについて，考えてみた。この作業は，すでに日本史研究者がさかんにおこなってきているものではあるが，西洋史研究者がこれをおこなった例は，ほとんどない。

４．研究成果
（1）動乱時代については，上述の研究会における訳読が順調に進行している。これはまだ継続中であるが，わが国では知られていなかった諸事実が，すでにいくつも明らかにされつつある。例えば，外国軍と国内の反乱軍，いわゆる「トゥシノの悪党」による，トロイツキー三位一体修道院の包囲について，攻撃側の実態や，修道院内部の状況など，これまで未知であった

事柄が明らかになりつつある。具体的な例について，ごく一部のみを挙げれば，①攻撃側の司令官の一人ピョートル・サピエハ（高位のリトアニア貴族出身）が，略奪者の頭目であったアレクサンデル・リソフスキーとともに，この包囲を積極的に推進したことが，まず明らかになった。従来は、ポーランドの支持を得た，第二の僭称者が立案・実行したものと思われていたのである。②修道院包囲は，１６０８年９月２３日に始まった。緒戦で敗退した攻囲軍は，２人の司令官のもと，それぞれに陣を構えて長期戦に入った。このうち，サピエハの陣地跡は，すでに発掘調査が進められている。③一方籠城側も，モスクワから派遣された司令官ドルゴルーキー公のもとに，結束して防衛にあたることを誓約した。もっとも，修道士以外の多くの人々は周辺の農民であり，一時的に難を逃れるつもりで修道院に逃げ込んだだけであったらしい。パーリツィンによれば，２千名以上が，修道院の中に閉じ込められたのであり，その惨状について種々の事実が明らかにされた。④１０月には，攻撃側は，大砲を用いたり，坑道を掘ったりして攻勢を強めた。その後，援軍のない籠城側は，疫病の流行，食料の欠乏などによりきわめて厳しい状況に陥ったが，しかしポーランド側の攻撃も緩慢で，修道院は容易に落ちなかった。⑤そのうち，１６０９年７月には，スコピン・シュイスキーに率いられたロシア軍の反撃が始まり，このような状況の変化のなかで，攻囲軍はついに撤退を余儀なくされた。籠城軍は，１６カ月間の包囲に耐え抜いたのである。

（２）ツァリーズム成立期の士族層の動向については，主に軍事史に関連させて，革命前から，現代にいたるまでの研究史の整理を行った。この成果は未刊行であるが，本年度中には，共著の一部として公刊される予定である。その結果を概観すると，①1917年の革命前までは，士族層に関する史料は，役所ごとに分散して整理・保管されていた。しかし革命後，それらの整理が進み，近代以前についてはロシア国立古文書館に，近代以降については軍事史料館において，その多くが保存されている。②近代以前の士族層に関する重要史料は，補任書である。これは，それぞれの官署に任命された貴族や士族の名簿で，これらを他の資料と突き合わせることで，どのような人物が，どのような役職についていたかを，ある程度知ることが出来る。③また，この研究は，次項の軍事史とも関連が深い。17世紀には，動乱時代だけでも多数の攻囲戦がおこなわれた。これ自体が，すでにこの時代の一つの特徴となっているが，それらの経緯を具体的にみることで，当時の社会の中での軍事の役割，あるいはまた士族層の役割について考えることができる。この点で，本成果は，上述の「研究成果（１）」とも関連している。

（３）狭義の軍事史研究は，西欧との比較に注目して行われた。具体的には，一連の『戦闘技術の歴史』シリーズの翻訳・刊行の作業を監修することで，研究を深めることが出来た。具体的な戦闘過程をみると，平時の社会からは伺うことのできない，当該社会の別の側面を垣間見ることが出来る。狭義の軍事史を学ぶ意義の一つは，ここにある。

①中世においては，戦闘は，身分制を表象するものとして，騎兵を中心に展開されたというのが一般的な理解であるとされる。これは誤りではないが，しかし，彼らはしばしば下馬して戦った。のみならず，民衆から編制される歩兵や弓兵もまた，一般に考えられているよりは，はるかに重要な役割を果たしていたことが，具体的な戦争をみれば明らかになる。つまり，戦場では，身分の上下にかかわりなく戦闘に従事しなければならないことがあり，その戦いの記憶は，社会に深く刻みこまれたであろう。それは，当該社会が不安定な状況になったとき，社会変革の一つのエネルギーとなったことも推測される。また，都市の結束の固さが，戦場で有利に作用したといわれる点についても，そのような理解は誤りではないが，しかし，そのためには厳しい訓練と優れた指揮・統率が必要だったのであり，都市が，単に共同体であるというだけで強力な軍隊を提供しえたわけではなかった。いずれにしても，戦争の研究は，中世社会の知られざる側面に光を当てるものであろうと思われる。

②近世においては，戦争の性格はもっと複雑になる。この時代の最大の特徴は，主権国家の成長ということであり，戦争は，中世のように王朝や貴族家門間の争いではなく，国家同士の衝突となった。国家の中心にはもちろん国王がいた。その権力は，実際には貴族や都市の団体によって制約されていたとはいえ，和戦の決定は国王の専管事項であり，戦争によって強力な国家を築こうとする国王の志向が，この時期には強くみられた。しかし，彼らがとくに好戦的であったということはできない。当時のヨーロッパは，強力な軍事力を持つもつもののみが生き残ることを許された，過酷な時代だったことを理解する必要がある。さらにいえば，近代国民国家は，１６－１８世紀の，いわゆる「戦争の３世紀」を経るなかで成長してきたということを，正しく理解しておく必要がある。

③戦争の歴史は，ナポレオンの登場とともに一変する。彼の戦争は，革命によって打ち立てられたフランス国家を防衛するための戦争という面を持っており，その限りで，文字どおり国家の存亡をかけたものとなった。クラウゼヴィッツの言葉を借りれば，「敵戦闘力の撃滅」が，戦闘の主たる目的となったのである。もっとも，ナポレオン自身は，新しい戦闘技術を開発したというわけでは，必ずしもない。彼が活用した戦闘技術は，その多くが，すでに開発済みのものであった。彼の功績は，その技術を極限にまで高め，いささかの躊躇もなしに，それを徹底的に実行したというところにある。こうして，１９世紀には，戦争は容赦のない殺戮戦の様相

を呈することとなる。この動向は，西欧のみならず，東のロシアにも及び，ここでもナポレオンの戦略に対抗するために，軍制改革や装備の「近代化」が進められた。ロシアでもこの頃には，かつての士族は，旧貴族門閥出身の将校たちと融合して，新たな貴族層を構成して社会の支配者層となっており，官僚として政治に携わるか，あるいは軍務について，国家のために勤務することが望まれていた。少なくとも軍事，とくに戦闘技術については，ロシアは，西欧と同等の能力を持っていた。ただ，専制政治に由来する社会統合の弱さという欠陥を持っており，戦争で望みどおりの結果がなかなか得られなかった。その顕著な事例が，クリミア戦争の敗北であった。こうして，いわば軍事大国であったロシアは，ほかならぬその軍事力の弱体化と対外戦争の敗北を契機に，改革の道を進むことになるのである。

（４）第４の課題は，日本人の戦争体験を通して，日本人の歴史認識の特徴，あるいはより正確にいえば，その「欠陥」を明らかにし，その現代的な意味を考えてみることであった。

①主要な史料は，当時の人々が書き残した日記であるが，なかでもとりわけ鋭い考察に富むものとして，山田風太郎の日記に注目した。

②また，戦争末期の日本国内の状況については無名の人々の回想録を主たる史料とした。

③また，戦争体験を検討する場合，外地における戦争と，内地におけるそれとは，同じ戦争でもその内容を全く異にすることを理解し，いずれの観点を重視するか，あらかじめはっきりさせておかねばならない。本研究では，一貫して後者の立場から，いわゆる「アジア・太平洋戦争」について，日本人の発想，戦争の記憶のあり方について追究した。

④戦争中は，最後まで戦い抜く気概を持ち続けていた山田は，戦後の日本人の豹変ぶりに鋭い批判の矢を向け，日本のゆくてには「寒々とした墓場」があると喝破した。彼は，「日本人は今後も長く，魂の分裂に悩まされるだろう」とも述べていたが，その発言の的確さは，近年になって，ますます強く感じられるようになってきている。フランス人ロベール・ギランのいう「日本人の真摯さの欠如」あるいはまた西洋史家増田四郎のいう「日本人の行き当たりばったりの性格，立身出世主義」には，いまも昔も，変化がないように思われるのである。ここからの脱出の道を探ることは，それ自体として歴史研究の課題となろう。

（５）最後に報告すべき成果は，学会報告である。史料の試訳についてはすでに述べた。ここでは，ロシア史研究会での報告について述べる。

①２０１２年は，ナポレオンのロシア遠征２００周年に当たっていた。「ロシア史研究会」は，この問題を考えるシンポジウムを開催した。詳細は以下のとおり。論題：「祖国戦争２００年」に寄せて：軍隊と社会　報告１．田中良英「１８世紀前半ロシア陸軍の特質」，報告２．松村岳志「大改革以前のロシア帝国国軍の精神」，報告３．池本今日子「アレクサンドル１世の世論=社会政策―ナポレオン戦争を背景として」，コメント：淺野明，司会：豊川浩一。

②上述のように，研究代表者の役割は，３本の報告に対してコメントすることであった。ここでは，主として狭義の軍事史の立場から，各報告について，意見を述べた。田中報告については，当時の政治体制と具体的な戦争を背景において，ロシアの軍隊編制について実証的に研究をおこなった点を評価した。松村報告については，わが国ではほとんどおこなわれていない狭義の軍事史の立場からの研究である点を評価しつつ，西欧の軍隊との比較の重要性を指摘した。池本報告については，ロシアの皇帝アレクサンドル１世が，軍人として実際に戦場で戦った経験があり，彼の外交政策，とくにヨーロッパ平和体制の構築という主張も，このことを念頭に置いて理解しなければならないことを確認した。

③独自の研究報告ではなかったが，このコメントを準備する過程において，上述した研究（１）～（３）について，これまで研究代表者がおこなってきた１６－１７世紀ロシアの軍隊に関する検討の意義と，西欧諸国の軍隊・軍制との比較の重要性について，改めて確認できたことは大きな成果であった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計２件）

１．淺野　明，ロシア史研究会2012年度大会における３報告へのコメント，2012年10月７日，立命館大学衣笠キャンパス。

２．淺野　明，パーリツィン研究会例会，史料の訳読，2011年12月11日，電気通信大学。

〔図書〕（計３件）

１．淺野　明（監修）ロバート・Ｂ・ブルース他著／野下祥子訳『戦闘技術の歴史４　ナポレオンの時代編』（創元社，2013 年）367 頁。

２．淺野　明（共著）『緑陰のつどい』（短編小説の会編，2012 年，非売品）145-180 頁，総頁 330 頁。

３．淺野　明（監修）クリステル・ヨルゲンセン他著／竹内喜訳『戦闘技術の歴史３　近世編』（創元社，2010 年）372 頁。

６．研究組織

(1)研究代表者

淺野　明（ASANO　AKIRA）

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：９０１３３９０９